

Classic な午後 — 「オットー・クレンペラーの世界」

クレンペラーで聴く初期ロマン派音楽

独逸系の指揮者の中でも、奇行・毒舌のエピソードの多い巨匠オットー・クレンペラー（1885-1973）は、若い頃の即物的な「現代音楽の闘士」から晩年「超スローテンポ」の雄大な演奏へと、ガラリとスタイルを変貌させたことでも知られています。

そんな彼が、初期ロマン派の音楽を演奏する時には、一転して実にチャーミングかつ柔らかな表情を見せるのは何故でしょう？

《曲目》

1. ウェーバー：「オイリアンテ」序曲，Op.81 (8 分 53 秒)

オットー・クレンペラー指揮（以下も同じ）フィルハーモニア管弦楽団

Rec.1961.10 London EMI

カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786-1826）は数々のドイツ語によるオペラ（ジングシュピール）を作曲していますが、現在我国で上演されるのはほぼ「魔弾の射手」に限られるようです。反面、それらの序曲はオーケストラコンサートでは好んで演奏されています（「オベロン」「アブ・ハッサン」等）。「オイリアンテ」序曲もそのうちの一つで、最初のフレーズが鳴った瞬間に劇場気分が横溢する佳曲です。

クレンペラーは、1907 年にマーラーの推薦によりプラハのドイツ民族劇場の楽長に就任したのを皮切りに、1920 年代後半にはベルリンクロルオペラの音楽監督（選曲、演出が革新的過ぎて、興行的には必ずしも成功しなかったようですが）、第二次大戦後はブダペスト歌劇場の指揮者、と壮年期は「劇場の人」として活躍していました。リハーサル中に主演ソプラノ歌手と駆け落ちするなど、全く優等生的な指揮者ではなかったようですが。

2. シューベルト：交響曲第 7 (8) 番ロ短調, D759「未完成」 (28 分 14 秒)

ウィーン・フィルハーモニー (Live)

Rec.1968.06 Wien DG

フランツ・シューベルト (1797-1828) の作曲した (おそらく) 最後から 2 番目の交響曲。1822 年に墺グラーツ楽友協会より名誉学位を受けた返礼として作曲が開始されましたが、何故か第 2 楽章まで送付された時点で作曲は中断してお蔵入りとなりました。その後、ウィーン楽友協会の指揮者をしていたヨハン・ヘルベック (1831-1877) により発見され、1865 年に初演の運びとなりました。その直後より人気交響曲の一つに数えられ、現在に至ります。

この名曲が「未完成」に終わった理由を詮索するのは、今となっては「野暮」というものでしょう。ただ、シューベルト全集が改訂される度に番号が変わる (私の若い頃は「第 8 番」でした) のは何とかならないものでしょうか 笑

第 1 楽章：Allegro moderato

第 2 楽章：Andante con moto

拙宅の襖襦スピーカーではハッキリとは聞き取れませんが、第 2 楽章終了直後に何者かが「Schoen! (美しい!)」と囁いているようです。事実上のマネージャーの、娘ロッテ・クレンペラーは、「クレンペラーの声ではない」と表明しているようです。だとすると、果たして彼以外の誰が発したものでしょうか？

3. メンデルスゾーン：交響曲第 3 番イ短調, Op.56「スコットランド」

(第 4 楽章は「クレンペラー版」) (44 分 45 秒)

バイエルン放送交響楽団 (Live)

Rec.1966.04 München EMI

フェリクス・メンデルスゾーン＝バルトルディ (1809-1847) は、1829 年にロンドンの楽友協会に招かれて渡英し、演奏会を催しました。その後のスコットランド旅行で首都エジンバラの遺跡・風景等に感動し、その印象を元に翌 1830 年イタリア滞在中にこの交響曲の作曲に着手しましたが、紆余曲折があって、完成したのは 1842 年になってのことです。「音の風景画家」と呼ばれた彼の特徴がよく表れた傑作です。全 4 楽章を続けて演奏するよう指示されています。

第 1 楽章：Andante con moto – Allegro poco agitato

第 2 楽章：Scherzo (Vivace non troppo)

第 3 楽章：Adagio

第 4 楽章：Allegro vivacissimo – Allegro maestoso assai (クレンペラー版)

なお、この演奏では第 4 楽章コーダ（結尾部分）の 95 小節がカットされ、新たにクレンペラーにより補筆されたものが挿入されています。これを、「短調のまま寂しく終わり雰囲気満点」とするか「暴挙」と見なすかは、皆さんのお好みに任せて、ということで。

4. (同上)：第 4 楽章（オリジナル版） (11 分 45 秒)

フィルハーモニア管弦楽団

Rec.1960.01 London EMI

コーダ（結尾部分）は、作曲者がスコットランド旅行中に聴いたバグパイプ演奏行進の強い印象を反映した勇壮な響きのするものとなっています。

第 4 楽章：Allegro vivacissimo – Allegro maestoso assai

人によっては「前 3 楽章と雰囲気が違い過ぎる」との感想を抱かれるようです。私はこの楽章（オリジナル版）が大好きなのですが…

5. シューマン：交響曲第 4 番ニ短調 Op.120 (28 分 16 秒)

フィルハーモニア管弦楽団

Rec.1960.05 London EMI

ロベルト・シューマン (1810-1856) が 1841 年に作曲した「二番目」の交響曲。当初は「交響幻想曲」と銘打たれ、①各楽章を続けて演奏する（上記「スコットランド交響曲」に先んずること 1 年）②所謂「ソナタ形式」が変形され、主題の展開部が拡張され、再現部が省略される 等の特徴があります。

初演（同年、フェルディナンド・ダーヴィト指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス）の評判は思わしくなく、その後作曲者により改作されて 1851 年に「交響曲第 4 番」として出版されました（改作版の初演は 1853 年、作曲者自身の指揮によりデュッセルドルフにて）。

第1楽章：Ziemlich langsam – Lebhaft（かなりおそく - いきいきと）

第2楽章：Romanze（Ziemlich langsam）（ロマンツェ - かなりおそく）

第3楽章：Scherzo – Lebhaft（スケルツォ - いきいきと）

第4楽章：Langsam – Lebhaft（おそく - いきいきと）

なお、この演奏も作曲者オリジナルの楽譜ではなく、クレンペラーの改訂によるものとなっているようです（「何処が」とは申し上げませんが）。

20世紀後半になってピリオド楽器を使った演奏が一般的になる前は、シューマンの交響曲は何らかの改訂を施した楽譜で演奏されるのが通例でありました。曰く「管弦楽法が稚拙」「響きが濁ってオケを鳴らしにくい」等々。クレンペラーに限らず、フルトヴェングラー、セル、ジュリーニ等、例を挙げればキリがありません。クレンペラーによる改訂は、「マーラー直伝」を誇っていたとか。

（計2時間1分53秒）

以上、大野真澄